

年間第24主日

すべてのいのちを守るための月間
祖父母と高齢者のための世界祈願日

福音朗読 マルコ 8・27-35

2024.9.15 9:30 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

今日の福音では、イエス様が旅の途中に、弟子たちに「人々はわたしのことをなんと言っているのか」また「あなたがたはわたしをなんだと思うのか」っていうふう質問される、そういう場面が朗読されました。

弟子たちがイエス様に告げた、人々がイエス様のことをなんと言っているのかというのは、洗礼者ヨハネやエリヤや預言者の一人——それは、でもエリヤも洗礼者ヨハネも預言者ですから——人々はイエス様のことを預言者と言っています。で、弟子たちはイエス様のことをメシア——預言者以上の、神様から特別の役割を与えられた、遣わされた方であると信じています、というふうに答えたというふうになっていくわけですが、この問いを、イエス様は人々がご自分のことをどう思っているのか、どう理解しているのかということを確認する、あるいは弟子たちがご自分のことを分かっているのかということを確認するために質問したようには、わたしには思われたいんです。

イエス様は人々からどう思われているかっていうことを気にする方ではないし、むしろ自分が理解されるよりも出会う人々のことを理解していこうっていう、そういう人というふうに福音書全体からはそのお姿をうかがい知ることができます。

ですから——どのように読んでもいいとは思いますが——むしろこの旅の中で、自分が人々に対して、あるいは一緒にいるこの弟子たちに対してどのような存在なのだろうか。あるいはどのような役割をその人々や弟子たちに対して自分が果たすように呼ばれているというか、遣わされているのだろうかという、自分自身がいったい何者であり、何をなすべきかということをはっきり確認していくために、弟子たちのとの対話の中でそれを見出していきましたっていうことを福音書が語っているのではないかなと思います。

だから、どう思われるかっていうよりは、人々に対して自分の役割はいったいなんなのか——預言者として神様のみことばを告げ、更に神様のもとに人々を和解させていく、導いていく、そういう使命を担っているんだという自覚をはっきり、人間としてのイエス様が弟子たちや人々との対話の中で見出して行った

——もちろん最終的には、人々との対話だけではなくて、ここに続く箇所では高い山の上で父である神様との対話を通してというふうに話は展開していきます。

そうして、もし人々に対して自分が預言者であるならば、またメシア——それ以上の役割——を担う者であるならば、この国の端っこのほうで——フィリポ・カイサリアっていう町は一つの豊かな町ではありますけれども、イスラエルの人々が住んでいる地域の中ではもう一番端のほうです。そして、マルコの福音書を読んでいけば、イエス様は、このころの旅は国の外に出ちゃったり、その辺でうろうろしているっていう、そういうことがイエス様の一行の移動を示す地名からは伺えるんです。

イエス様がどうしてガリラヤ——出身地であるガリラヤ地方そのものも辺境ではありますが——更にその周辺の所をうろうろしている。それは、イエス様が神様の本当の望みを人々に告げようとしたために、ファリサイ派とか律法学者という宗教的な権威の人から迫害されて、それを逃れなければならないということを通して、だんだん端っこのほうに活動の拠点が移っていったということを想像することができます。

でも、イエス様は、「自分が預言者ならば、メシアならば、この端っこで自分を受け入れる人たちだけと一緒に過ごしている場合ではないんだ。たとえ大きな反対に出会うとしても、ファリサイ派や律法学者もいる、人々の信仰の中心であるエルサレムに行って、神様のみこころを告げなければならない」、そのように道を、定まったというか、見出した。今日の箇所がそういうひとつのターニングポイントであると考えられます。

マルコの福音書は、それ以前はそういう端っこのほうでうろうろしてたイエス様が、今度は真っ直ぐエルサレムへ向けて旅を始められるっていうふうにお話は続いていくことになります。

わたしたちも、周りの人との関係で自分自身がどのような役割を神様から委ねられているのか、期待されているのか、そこに呼ばれているのかということ時々思い起こして、あるいは神とともに振り返って考えてみるということは必要なのではないかなと思います。ともすると、自分を中心に置いて、周りの人が自分にとってどういう役割を果たす人なのかなっていう、自分の視点で周りの人を、ラベルを貼ると言いましょうか、位置付けていくというような気持ちになってしまうことが多いように思うんですけども、でも、そうではなくて、他の人とのつながりの中で自分が神様から任されている役割をなんなのかと、それこそがある意味では自分自身を見出す道ということになるのではないかと思います。

それは決して周りの人が押し付けてくる役割をただ言いなりになるとか、社会的に期待されていることを、自分の意思とは関係なく、課されてくるものを受け取りなさいと、そういうようなことを言っているわけではありません。イエス様も、ペトロが——「メシア」っていう言葉でペトロがイメージしていることと

イエス様がイメージしていることが全然違うということがあとで明らかになって来ます——ペトロが自分がイメージする「メシア」っていう役割に従ってイエス様の行動を決めていこうとするときには、イエス様はそれをはっきり拒絶しているという、その姿が今日の福音の中にも垣間見ることができました。

わたしたちは他の人の言いなりになるのではない——人の思いではなくて、更に言うならば自分の思いだけでもない——他の人とのつながりを神様の御前で振り返りながら、「今神様が、周りの人との関係の中で他の人に対して、身近な人に対して自分が何をすることを望んでおられるのか」ということを思い起こす。それこそがキリストに従う道なんだろうなと思います。

でも実際にそれぞれ、生活の中で、今自分が果たすべき役割っていうことを懸命にしようとしている方々も、この中にも少なくないと思います。それこそが、たとえイエス様のことを直接誰かに教えたりとか、教会に引っ張ってきいたりとか、そういうことではなくても、それこそがまさに自分が周りの人との関係の中でまさに今これをやるべきなんだと、やらなければならない——やりたいことではないかもしれない、でもやらなければならない——として一所懸命やっている。それはまさにイエス様の今日の姿にもつながるし、皆さんのためにイエス様ご自身が力づけ、実りの喜びに出合わせてくださるように、その祝福を願いたいと思います。

そしてまた、そういう気持ちではない、いつも自分中心で思ってしまうなあというときに、でもこのイエス様のお姿を思い起こしながら、わたしたちが今日も一人ひとりの中にお迎えしようとするイエスご自身の恵みによって心が開かれて、そして勇気をもって、神様との対話のうちに、今他の人に対して、周りの人に対して自分が神様から呼ばれているその役割を見出すことができますように、その導きを願いたいと思います。一人ひとりの上に、ともにおられるイエス様とともに歩む、その支えと導きを願いながら、このごミサをお捧げしたいと思いません。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>